「自分とは～仏さまの尺度」

●自分とはなんだろう

分析心理学者の河合隼雄先生の『中年クライシス』（朝日文芸文庫、1996年）を読みなおしました。

「人間は、中年になるとあらてめて自分とは何者かと目を向ける。
若い時にも、望みを求め、やりたい職業、結婚したい相手を見つけ、自己を確立させていく。
ある程度成功して、その時、自分とは何かと考える時、これが自分だと支えてくれるものを、社会的地位や、年収や財産などという尺度に見出すことができる。
自分は○○会社の課長だ、と思う時、その会社に対する社会的評価や、職責としての課長という価値に支えられ、自分はたいしたもんだ、と感じる。
これらの評価は、他人と比較が簡単で、例えば、年収ならば、住む場所も職業も問わず順番がキッチリとつく便利さ、分かりやすさがある。」（筆者取意）

言い換えれば、年収などという“一般的な尺度”というのは、分かりやすいけれども他の誰かであっても当てはまるもので、自分でない誰かと交換可能だというわけです。

しかし、人間が、これが「私」だと考えるときに、これらとはまったく違う尺度もあるのではないだろうかと河合先生はいいます。

たとえば、これが「私」だといえるのは、今ここに一人で登山をし、山小屋の前に佇み、遙か山々の峰を眺めて、それだけで充分だという感覚です。

その時、「私」を支えてくれ、「私」を成り立たせている山や空気や、身体の疲労や、それらが渾然一体となり、すべてが、“かけがえない”という尺度となるのでしょう。

私は、“かけがえない”という尺度ではないかと受けとめました。

●落とし穴

2019年に、大手電力会社が、国策の原子力発電事業を進める中で、地方行政の元助役と不明瞭な金品授受を行ったという報道がありました。時代劇のようですが、金品には、菓子箱に“小判”が入ったものもあったそうです。

先ほどの『中年クライシス』の言い方でいえば、自分を評価するのに、「金品」という誰にでも分かる尺度が、このやり取りには用いられた訳です。

しかし、この出来事は、自分を確認し、自分の役職の権力の大きさを誇示した時に、これだけの「金品」が動くのだという尺度は、分かりすいと同時に、大切なものを見誤る可能性もあると教えてくれているようにも思いました。なぜなら「金品」という尺度は、貨幣経済社会に生きる私たちにとって落とし穴にもなるからです。

誰にでも分かるこうした尺度に振り回されて、“かけがえない”という尺度を見失った姿を河合先生は、次のようにいいます。

「山に登り、峰を眺め、これが「私」だという感覚が分からない人は、山を見ている「私」を考えているようだが、その時見た山が、海抜何メートルだとか、交通費は幾らだったとか、そこは有名な山かとか、結局、その尺度は、『一般的な尺度』に頼っている。」（取意）

●テレビは救ってくれない

過日、ある家庭報恩講※1にお参りした時、近くに住む女性が車で、わざわざ、お参りに来ていらっしゃいました。その家に育った方で、大変ご法義※2なお母様に育てられ、ご縁があれば、“おみ法”に遇いにお参りされています。お勤めのあと、よもやま話に花が咲き、帰り際、子どもの頃の思い出話しをうかがいました。

テレビばかり見ていると、亡きお母様から、「いくら見ても、テレビは、救ってくれませんよ」と言われたというのです。もちろん、お内仏の如来さまに、お礼をしなさいよ、ということをこんな言葉で勧めてくれたのです。けだし名言ですね。

テレビは、色々な情報を与えてくれます。いわば、“一般的な尺度”としての情報を身につけるのに便利な道具です。

それに対して、お仏壇に参り、教えを学び、仏さまにお礼をする生活習慣は、私に、これこそが「私」だと感じられる心を育てて下さるのでないでしょうか。

“かけがえない”自分を育てて下さる仏さまの尺度を恵まれることを大切にしたいと思いました。

※1　宗祖親鸞聖人のご命日法座は、寺院だけでなく、門徒のお内仏（お仏壇の阿弥陀如来の御尊前）でも勤められてきました。
※2　法義は、もともと、仏法の教えや各宗派の教えのことをいいますが、「ご法義な」という使い方をするとき、浄土真宗のみ教えを大切にし、深い信心に生きるお姿をいうようになりました。今でも、ご法義な土地柄では、日常語として使われています。

合掌

万行寺第十八世住職　釋静芳（本多 静芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。